

「万能自律機械学習システム 1 3」で書き足りなかったことを記述していきたく思います。重み付投票ネットワーク（ニューロ・コンピュータ）は辞書でもあるのです。

それは、先ず、2項関係を考えてみることで分かります。様々な文をセンサー入力と同時に入力されれば、2項関係は単語の二乗だけ作られるでしょう。実際にはそれよりも少ないですが、基本的には覚悟する必要があります。できるだけ、早く抽象化して、エンタリ数を減らさねばいけません。そこは、置いておくこととして、たとえば、of と関係する2項関係ノードのセットはこんな感じになります。

(of(agent_case),I) (of(owner_case),I),(of(direct_object_case),I) . . .

(of(agent_case),I)は、「it is kind of you to give this chocorate.」を想定。

(of(owner_case),I)は、「chocorate of you」を想定。

(of(direct_object_case),I)は、「I am wary of strangers.」を想定。

そうして、このノードは4項関係、8項関係のノードへと重み付投票していきます。そんな、多段階のニューロコンピュータを構成するのです。その入り口となる2項関係ノードは、原文の単語列とのマッチングを行って、選択することになって、その部分で、ニューロコンピュータは辞書となるわけです。重み付投票はそんなシステムではRDBで実現していくことになるでしょう。なんせ、ノード数が沢山ありますから、インメモリというわけにはいかないでしょう。

そうして、抽象化もそんなRDB上でやっていって、重みの変更で、徐々に抽象化された情報を持っているノードが残っていくようになるといえます。

おわり